

イノシシの個体数を推定する

1. 自動撮影の写真で個体識別できる

赤外線自動撮影カメラを用いてイノシシを正面および上からの二方向から撮影することで、出没頭数・性別・年齢を把握することが容易になった。また、捕獲時に付けた耳標の確認や体の大きさ・四肢・耳・犬歯などの体の特徴から個体識別が可能であった。



図1. 自動撮影カメラで撮影されたイノシシ

2. 個体数を推定する

上記の方法で識別した個体を別の期間に再確認した確率から個体数を推定することができた。これは標識再確認法といわれる方法で、推定するためのモデルやそのためのソフトがいくつかある。個体識別ができない場合でも、調査期間に撮影されたイノシシの頭数が相対的な個体数の指標となりうることは明らかになった。

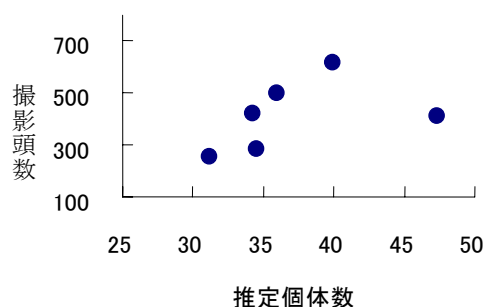


図2. 推定個体数と撮影頭数の関係

3. 獲っても減らない

3年間の調査期間中に耳標をつけた個体の6割以上が捕獲されているにもかかわらず、個体数はほとんど変わらなかった。新たに生まれた個体が加入していることがその原因と考えられる。その一方で、自動撮影カメラには写るが、3年間捕獲されない個体が複数いた。自動撮影用の餌は食べていたことから、捕獲されないように巧みに捕獲用の餌も食べている可能性が高い。

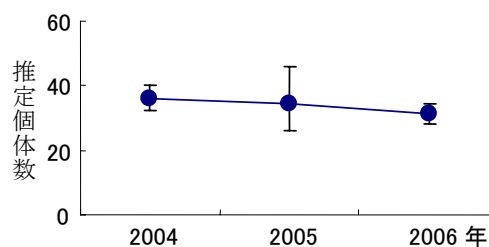


図3. 個体数の年次変化

被害対策のポイント

1. かなりの捕獲圧をかけてもイノシシの個体数はなかなか減少しない。捕獲だけに頼らずに、農地への侵入を防止する対策が必要である。
2. 農地周辺では捕獲する際には、捕獲檻の外の誘引用の餌は必要最小限にする。必要以上にまくと食い逃げされるだけで、かえって農地に誘引してしまうことになる。

<課題名> 生息密度および個体数の推定法の開発

<目的> 近年、中国地方の中山間地域ではイノシシによる農作物被害が深刻化している。このような状況で各府県では特定鳥獣保護管理計画を作成し、個体数管理、生息環境管理、被害防除対策を行うことで、被害の軽減を目指している。しかし、イノシシの場合には個体数管理を進めていくための個体数や密度の推定法が確立されていない。そこで、本研究ではイノシシに適用できる個体数推定法を開発することを目的としている。

<成果の問い合わせ先>

上田 弘則（うへだ ひろのり）

近畿中国四国農業研究センター 鳥獣害研究チーム

島根県大田市川合町吉永 60

電話 : 0854-82-0060

メール : hueda@affrc.go.jp